



亀中だより

No.20 令和5年7月18日 文責 岡田



For The Students!

“備えあれば憂いなし”は本当？

“備えあれば憂いなし”とは、「前もって準備を整えておけば、いざというときに何かことが起きても心配することはない」という意味のことわざです。果たして本当でしょうか。



6月28日、避難訓練を行いました。熱中症警戒に加えて雷注意報も発令されていたため、大事をとって避難経路を確認しつつ、体育館に集合する形をとりましたが、全校生徒が整然と真剣に移動している姿が印象的でした。避難訓練はまぎれもなく、まさかの時のために準備しておくためのものであり、しっかりとした備えをしておくことは大切と考えています。しかし昨今の異常気象などの様子を見聞きすると、どれだけ備えても憂いが残るのが実情です。「想定できないことが起こることも想定しなくてはならない」ということかもしれません。避難訓練の場でも全校に話しましたが、「憂いなくして備えなし」も大切な考え方かと思います。不安や心配があることで、何をすべきかを考えることができます。このことを大切に日ごろから準備していきたいものです。

亀中生がアナウンサーに!



亀山市の行政情報番組「マイタウンかめやま」に亀山中学校から2人の生徒がアナウンサーとして登場します。毎年夏休みに行われる特別企画ですが、今年は3年生の大平真季愛さん、矢野夏美さんが出演することになりました。二人の出演は8月11日(金)～17日(木)で午前6時から午後0時まで30分番組をリピートで放送されるとのことです。みなさんぜひご覧ください。お楽しみに!

1 学期が終わります。夏休み前におすすめの一冊から…

まもなく1学期が終わろうとしています。保護者、地域のみなさまにご理解、ご協力をいただき、無事に学期末を迎えることができました。本当にありがとうございました。

いよいよ夏休みとなります。中学生の夏休みは意外に忙しいものですが、お盆の時期を中心に家族としての時間も増えることでしょう。また、地域行事なども今年は再開される場所も多いと聞いています。家庭、地域との時間を大切にしたい夏休みとしてほしいものです。

さて、私が親子のことを考えるとき、いつも思い出す一文があります。保護者のみなさんにとって、もきっと心を揺さぶられるところがあると思います。ご一読ください。(次ページへ)

「父は忘れる」 リヴィングストーン・ラーネッド

坊や、きいておくれ。お前は小さな手に頬をのせ、汗ばんだ額に金髪の巻き毛をくつつけて、安らかに眠っているね。お父さんは、ひとりで、こっそりお前の部屋にやってきた。今しがたまで、お父さんは書斎で新聞を読んでいたが、急に、息苦しい悔恨の念にせまられた。罪の意識にさいなまれてお前のそばへやってきたのだ。



お父さんは考えた。これまでわたしはお前にずいぶんつく当っていたのだ。お前が学校へ行く支度をしている最中に、タオルで顔をちょっとなでただけだといって、叱った。靴を磨かないからといって、叱りつけた。また、持ち物を床の上に放り投げたといっは、どなりつけた。今朝も食事中に小言を言った。食物をこぼすとか、丸呑みにするとか、テーブルに肘をつくとか、パンにバターをつけすぎるとかいて、叱りつけた。それから、お前は遊びに出かけるし、お父さんは停車場へ行くので、一緒に家を出たが、別れるとき、おまえは振り返って手を振りながら、「お父さん、行っていらっしゃい!」といった。すると、お父さんは、顔をしかめて、「胸を張りなさい!」といった。



同じようなことがまた夕方に繰り返された。わたしは帰ってくると、お前は地面に膝をついて、ビー玉で遊んでいた。長靴下は膝のところが穴だらけになっていた。お父さんはお前を家へ追いかえし、友達の前で恥をかかせた。「靴下は高いのだ。お前が自分で金をもうけて買うんだったら、もっと大切にするはずだ!」これが、お父さんの口から出た言葉だから、われながら情けない!

それから夜になってお父さんが書斎で新聞を読んでいる時、お前は、悲しげな目つきをして、おずおずと部屋に入ってきたね。うるさそうにわたしが目をあげると、お前は、入口のところで、ためらった。「何の用だ」とわたしがどなると、お前は何もいわずに、さっとわたしのそばに駆け寄ってきた。両の手をわたしの首に巻きつけて、わたしに接吻した。お前の小さな両腕には、神さまがうえつけてくださった愛情がこもっていた。どんなにないがしろにされても、決して枯れることのない愛情だ。やがて、お前は、ばたばたと足音をたてて、二階の部屋へ行ってしまった。

ところが、坊や、そのすぐ後で、お父さんは突然なんともいえない不安におそわれ、手にしていた新聞を思わず取り落としたのだ。何という習慣に、お父さんは、取りつかれていたのだろう!叱ってばかりいる習慣—まだほんの子供にすぎないお前に、お父さんは何ということをしてきたのだろう!決してお前を愛していないわけではない。お父さんは、まだ年端もゆかないお前に、無理なことを期待しすぎていたのだ。お前を大人と同列に考えていたのだ。



お前の中には、善良な、立派な、真実なものがいっぱいある。お前の優しい心根は、ちょうど、山の向こうからひろがってくるあけぼのを見るようだ。お前がこのお父さんにとびつき、お休みの接吻をした時、そのことが、お父さんにははっきりわかった。ほかのことは問題ではない。お父さんは、お前に詫びたくて、こうしてひざまずいているのだ。お父さんとし



ては、これが、せめてものつくないだ。昼間にこういことを話しても、お前にはわかるまい。だが、明日からは、きっと、よいお父さんになってみせる。お前と仲よしになって、一緒に遊んだり悲しんだりしよう。小言を言いたくなったら舌をかもう。そして、お前が子供だということを常に忘れないようにしよう。

お父さんはお前を一人前の人間とみなしていたようだ。こうして、あとけない寝顔を見ていると、やはりお前はまだ赤ちゃんだ。昨日も、お母さんに抱っこされて、肩にもたれかかっていたではないか。お父さんの注文が多すぎたのだ。